

福井市立郷土歴史博物館「福井の仏像」展

福井市立郷土歴史博物館で「福井の仏像」展が開かれている。11月23日までの期間だ。博物館の学芸員である藤川明宏さんの説明を聞きながら展示室内をくまなく見た。「未完成の表現」、「一木造りのためにかたむいた身体」というキーワードが印象に残った。複数の仏像がそれに該当している。もしかするとこれは福井の仏像の共通点であり、特徴といってもいいのかもしれない。

江戸時代の修復で体全体が和紙で包まれた仏像があり、その和紙がきれいにはがれたことに驚いたそう。和紙を貼りつける方法でなかったら、本来のお顔を拝むのに時間も費用ももっとかかっただろう。江戸時代の修復は後世の人がもう一度ていねいに修復してくれることを信じておこなわれたのだろうか。そんな過去も見ることができる特別展だったと思う。

印象にのこっている仏像が二体ある。

一つ目は荒谷観音堂の聖観音だ。一木造りでかたむいた身体に、荒く彫られた未完成の肌が特徴だ。土筆のようにしなやかにのびた身体は、見たことがあるはずもない原木の姿をイメージさせる。動きを止めた身体と鈍彫(なたぼり)の表面は、

京都国立博物館でみた宝誌和尚立像に似ていると思った。しかしなぜだろう。この福井の聖観音からは、まるで年輪のように、この土地で過ごした時の長さが伝わってくる。きっと微笑んだようなそのお顔で、永い間福井の人々を見守って来られたのだろう。そんな面影を感じさせる尊像だった。ちなみにこのお像は明宏さんがぜひ展覧会に招きたいと思った仏像の一つでもあるそうだ。

二つ目は鎌倉時代に作られた勢至菩薩だ。展示会場の順路にしたがい、向かって右側から歩いていくとあっと驚く。背中の丸みや端正な顔立ちがすばらしいからだ。そしてそのまま仏像の正面まで歩こうとして、思わず立ち止まった。右目のかたちに驚いたからだ。修復により、もともとは見えていなかったはずの玉眼部分があらわになって、左右の目の開き方が違ってしまっている。修復した人も大きく開いてしまった右目に驚いたことだろう。そのためか、左目は右目ほど大きく形を損ねていない。いやもしかしたら逆かも知れない。左目の修復がそこそこ思い通りにできたから、右目を誤って開きすぎたのか。修復しようと思ったのは仏像に対しての思い入れがあるからだ。その修復が仏像の姿を損ねてしまったのは悲しい。

その後、特別展のとなりの部屋でお地蔵さまの展示をみた。県内の地蔵菩薩の由来がまとめてあるだけでなく、来館者が地蔵菩薩の発見・目撃情報を付箋に書き込んで貼り付けてある。福井大学の博物館実習で作られたマップや地蔵菩薩の塗り絵もあった。ありがたく一枚いただいた。

飯島可琳